

大会長講演

■ 2018年11月24日(土) 13:40～15:10 ■ A会場 (3F メインホール)

ユビキタス時代の医療ICTへの挑戦ー医療保健チームの広がりとなんだな機能分化ー

[3-A-3-1] [鼎談] ユビキタス時代の医療ICTへの挑戦ー医療保健チームの広がりとなんだな機能分化ー

○坂本 すが¹, ○飯野 奈津子², ○宇都 由美子³ (1.東京医療保健大学副学長, 2.NHK解説主幹, 3.鹿児島大学大学院医歯学総合研究科)

わが国の医療・介護は、2025年問題に象徴される高齢化の速度と量の問題への対応に揺れ動いています。「効率的かつ質の高い医療提供体制の構築」と「地域包括ケアシステムの構築」が掲げられ、最終的には、「利用者の視点に立って切れ目のない医療及び介護の提供体制を構築し、国民一人一人の自立と尊厳を支えるケアを将来に渡って持続的に実現していく」ことが目指されています。これらを本音ベースで言い換えると、何とかして、限られた医療・介護資源の中で、効率を高め、質も維持・向上させながら、乗り切きたいということになります。切れ目のない医療・介護の提供体制の構築に関する取り組みは、今に始まったことではなく、「保健・医療・福祉の連携」として、何十年間もその時々の方策に反映されてきました。しかし、各ケースの情報共有程度では済まなくなってきたため、医療も介護もわかるという人材レベルの育成・共有という段階に進もうとしています。

高齢化の速度と量の問題への対応について、厚生労働省は平成27年6月に、「保健医療2035提言書」を出し、「キュア中心からケア中心へ」を挙げています。ケアの担い手として、看護職はこれまで以上に在宅医療や介護施設での活躍が期待されています。限られた医療・介護資源の中で、より効率的・効果的に山積した問題解決に当たっていくためには、ユビキタス社会を背景としたICTの活用によって、突破口が得られるはずだす。そして、それを支える医療保健チームの役割拡大と機能分化に新たな工夫ができれば、どこに住んでいても適切な医療・介護を安心して受けられる社会が実現できるはずだす。

大会長講演と言う貴重な機会を賜りましたので、元日本看護協会長の坂本すが先生、NHK解説委員の飯野奈津子先生のお力をお借りして、本大会のテーマに果敢に取り組んでみたいと思います。大会長の私が凡人なので、あえて「三人寄れば文殊の知恵」と書かせていただきますが、文殊の知恵を持っておられるお二人と凡人の浅はかな智恵しか持たない私が、90分間に渡って繰り広げる鼎談を、是非お楽しみください。

ユビキタス時代の医療 ICT への挑戦

- 医療保健チームの広がり新たな機能分化 -

(鼎談)

宇都 由美子^{*1}、坂本 すが^{*2}、飯野 奈津子^{*3}

^{*1} 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科医療システム情報学

^{*2} 東京医療保健大学副学長、公益社団法人日本看護協会前会長

^{*3} 日本放送協会解説主幹

JCMI Presidential Speech

Uto Yumiko¹, Sakamoto Suga^{*2}, Iino Natsuko^{*3}

^{*1} Dept. of Medical Information Sciences Graduate School of Medical and Dental Sciences Kagoshima University,

^{*2} Tokyo Healthcare University,

^{*3} Japan Broadcasting Corporation

Abstract

Keywords: JCMI Presidential Speech.

1. はじめに

わが国の医療・介護は、2025 年問題に象徴される高齢化の速度と量の問題への対応に揺れ動いている。「効率的かつ質の高い医療提供体制の構築」と「地域包括ケアシステムの構築」が掲げられ、最終的には、「利用者の視点に立って切れ目のない医療及び介護の提供体制を構築し、国民一人一人の自立と尊厳を支えるケアを将来に渡って持続的に実現していく」ことが目指されている。これらを本音ベースで言い換えると、何とかして、限られた医療・介護資源の中で、効率を高め、質も維持・向上させながら、乗り切きたいということになる。切れ目のない医療・介護の提供体制の構築に関する取り組みは、今に始まったことではなく、「保健・医療・福祉の連携」として、何十年間もその時々施策に反映されてきた。しかし、各ケースの情報共有程度では済まなくなってきたため、医療も介護もわかるという人材レベルの育成・共有という段階に進もうとしている。

2. ユビキタス時代の医療 ICT への挑戦

高齢化の速度と量の問題への対応について、厚生労働省は平成 27 年6月に、「保健医療 2035 提言書」を出し、「ケア中心からケア中心へ」を挙げている。ケアの担い手として、看護職はこれまで以上に在宅医療や介護施設での活躍が期待されている。限られた医療・介護資源の中で、より効率的・効果的に山積した問題解決に当たっていくためには、ユビキタス社会を背景とした ICT の活用によって、突破口が得られるはずである。そして、それを支える医療保健チームの役割拡大と機能分化に新たな工夫ができれば、どこに住んでいても適切な医療・介護を安心して受けられる社会が実現できるはずである。

3. 鼎談に当たって

大会長講演と言う貴重な機会を賜りましたので、前日本看護協会長の坂本すが先生、NHK 解説主幹の飯野奈津子先生のお力をお借りして、本大会のテーマに果敢に取り組ん

でみたいと思います。大会長の私が凡人なので、あえて「三人寄れば文殊の知恵」と書かせていただきますが、文殊の知恵を持っておられるお二人と、凡人の浅はかな知恵しか持たない私が、90 分間に渡って繰り広げる鼎談を、是非お楽しみください。

4. キーワード

1) 医療保健チームの再編と新たな機能分化

我が国においては、高齢社会への対応と共に、生産労働人口の減少という課題も抱えている。そのために、労働生産性をあげ、仕事満足度を高めるために「働き方改革」が急ピッチで進もうとしている。これらの社会的な変化を背景として、医療と介護連携における医療保健チームの再編と新たな機能分化が進むことが予測される。

2) 医療保健チームにおける共通言語

保健医療福祉サービスが専門職・非専門職の協働の下で提供されることを鑑み、専門職・非専門職が内容を理解できるような看護情報の提供を目指した今後の取組みが重要となる。

3) 高度看護支援システムとしての AI の活用

看護の専門性を高め、今後の二次利用に耐えうる看護記録を支援する標準的なマスタ開発や、AI の活用を視野に入れた挑戦的な取組みの未来予想図を描いてみたい。

4) 人材育成

ケアからケアへのパラダイムシフトに伴い、看護職の担う役割や責務が大きく変化していくことが予測される。そのためどのような人材育成を進めていくべきか議論したい。

